
山手線イス取りゲーム

サヤカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山手線イス取りゲーム

【Nコード】

N5621L

【作者名】

サヤカ

【あらすじ】

都会のど真ん中で、毎日繰り返されるイス取りゲーム。そんな日常の隙間で、私が見たものは……
悩める中学生の悩めるお話。 2、3話で完結予定。

どうせこいつは巢鴨で降りる、とでも言わないばかりに、サラリーマンが私の前の吊革に寄ってくる。その行動が勘に障ったというだけの理由で、私は自分の降りるべき駅で、扉が開いて、閉じていくのを見届けた。

吊革に捕まりながら、私を見下ろすサラリーマンが、きよとんとしたのが分かる。きつとたぶん絶対に、目の前のおじさんは、こう思ってる。清良学園の制服着てんじゃん。降りるよ巢鴨だろ何ぼーっとしてんだよ。そして俺を椅子に座らせろよ。ガキには分からないくらい疲れてるし、眠いんだよ。

何なんだろう、朝の電車って。

私はぼうつと顔をあげて、電車の窓の外で流れてゆく景色を見た。見慣れた巢鴨のホームが遠ざかっていった。職場や学校や地下鉄のホームを指して、人の群が、それなりにうねっている。その中に、私と同じ制服を着た中学生の姿も、チラチラとまざっていた。

次の駅で降りて、引き返した所で遅刻は確定だ。車内アナウンスが告げる「こまごめ」の音を他人事のように聞きながら、私は立ち上がる気にもなれずしばらくとしていた。駒込まで行くのは初めてだ。そこで降りて散歩を試みるのも楽しいかもしれない。だけど制服を着たままで、隣駅を昼間から歩くのはどうなのだろう。どうせ行くなら、どこまでも流されてみたい気がする。

自宅のある目白駅から、池袋、大塚、巢鴨。四駅だけの通学電車にもいい加減に慣れてきた。去年まで背負っていたランドセルを放って、私立の中学で背伸びをすることにもちよっぴり慣れた。だけど、どちらも好きになることはできなかった。

季節は秋。夏休みを挟んで二学期が始まってからが、これまで以上に億劫だった。ゴールデンウィークに気を抜きすぎて、大人は五

月病になるとか言う話をこの前初めて聞いたけど、これはそういう気持ちなのだろうか。

通学を使う山手線で見ると、サラリーマンやOLたちの、目の死にっぷりを目の当たりにすれば、さらにやる気が殺がれてゆく気がする。中でも、椅子に座ることばかりを考えて、巣鴨の学校の制服を着た子供の前に、いそいそと寄ってくる者の多さと言ったら！立つ元気がないなら仕事に行くのなんてやめちまえ、と、口には出せない汚い言葉で思ってみる。きつと、そうはいかないのだろうか。

日本全国で、何百何千万という人間が、こうして死んだ目の朝を迎えているのかと思うと、不思議な気がした。ならば、私が憂鬱な気持ちで登校した時に、挨拶の声が小さいと怒鳴り散らす教師はなんなのだろうか。

それとも、ここにいる半死人たちは、職場につけば顔を作るのだろうか。先生たちが威張り散らしているのと同じように。だとしたら大人という生き物は何なのだろうか。この電車という空間はなんなのだろうか。

電車は本当に不自由で、本当に自由な空間だ。通学を始めて、強くそう思った。

ぎゅうぎゅうに人が詰まっていることもある。座れないこともある。座れることもある。同じ電車を目指しても、同じような場所を確保することは難しい。たまに人身事故でダイヤが乱れる。人がひとり死んでみたところで、群衆の感情は意外と乱れなかつたりする。知らない人の知らない人生よりも、自分が職場につく時間の方が、誰もにとって一番重要なことなのだという概念が、当たり前なものとして成立している。だけど、それを当たり前と感じてしまうのは、なんとなく怖い気がする。

電車の人口密度は息苦しくて、目白からは下り方向と呼ばれている外回りですら嫌な感じである。だけど、これだけたくさんの人がいながら、ほとんど全員がどこまでも他人で、名前も職業も知らないのだから。

似たような服を着た人を、徹底的に無視して個人個人が過ごしている。寝る人、新聞を読む人、本を読む人、音楽を聴く人。月曜日になるとジャンプを読んでいる人が絶対にいる。それを横や後ろからチラチラと覗く人も絶対にいる。座席で眠って隣の人にこつんと寄りかかる人が絶対にいる。抵抗を諦めて肩を貸してやる人もたまに見る。そんなカップルみたいな格好で過ごしながらも、隣同士の間はあくまで他人であり別々であり、自分の駅の名前が呼ばれたら、無情に永遠の別れを遂げる。

この世のどんな場所よりも、個人主義な空間なのではないかと錯覚してしまう。

学校にいる時には挨拶を強要される。協調性を養えと言われる。でも、この電車の中では、無愛想になることを許される。むしろ推奨されている。

個人が王様なこの空間で、群衆は座席を求めあつて蠢いている。乗客は、とにかく楽な体勢と睡眠に飢えていて、それを得るためなら、多少は強引な手段にでも出る。学校で教師が崇拜している「思いやりの気持ち」なんてまったくなく、他人を弾きとばしてでも座ろうと急いでいる人が、びっくりするほどいっぱいいる。

たかが四駅の通学期間で、私が座席に座るようになったのは、それを理解した時だった。若いから、近いからという理由で、立ちっぱなしなのはしやくな気がした。自分以外のものは何も見えない、とても言いたげな仮面の群衆の機械的な流れが、やっぱりなんだか、気に入らなかつたのかもしれない。

目白で座れなくても、隣駅の池袋で、大きく人が入れ替わる。その波に乗って座席を確保することはわりと簡単だ。

だがその池袋ですでに、乗ってきたサラリーマンがしめしめ学生だとも言いたげに、さりげなく寄ってくる。この繰り返しがあるんだか滑稽で、意地悪や抵抗がしてみたくなかった。たったそれだけの理由で、ああ、駒込の扉が開いてしまった。

気がつけば、電車はさらに進んでいった。

田端、田端、というアナウンスを聞きながら、私はぼうつと顔をあげて、ドアの上にあるモニターの路線図をみた。田端、西日暮里、日暮里……。どんどん馴染みのない駅に変わっていく。日暮里って地名は、なんだか聞いたことがある気がする。

路線図を改めて見やって、この電車は本当に一周も二周も三周もするのかと、今更ながらに愕然とした。私がこのままずっと乗りっぱなしでも、目白に戻ることができるのだ。そして池袋で、同じようにサラリーマンが乗るのだろうか。

入れ替わり立ち替わり、似たやりとりばかりが、繰り返されるのだろうか。

円上の電車を走らせようなんて発想をした人は、天才なのかバカなのか。東京というこの都市の中心で、密集しなければ回転しない社会はなんなのか。

まだ知識も経験も足りなさすぎて、分からないことがとても多い。けど分からないなりに、なんだかとっても漠然と、世の中ってバカだなあと思った。田端でちらりと見えた向かいのホームに、青いラインが入った別の電車があった。それはこちらより、さらに混んでいた。立っている人がぎゅうぎゅうにひしめき合っていた。

世の中ってバカだなあ、と、やっぱりそんなことを思った。

電車はぐんぐん進んでいく。駅の名前を呼ばれることに、椅子から人が立って、去ってゆく。空いた椅子を、たまたま近くにいたラッキーな乗客がすぐさま奪う。その様子をぼうつと眺めていて、何かに似ていると思った。そうだ。

イス取りゲームだ。小学校ではたまにやった遊びが、大人の社会で、都会の中心で、ぐるぐると永遠のように、繰り返されているのだ。

上野、上野と、アナウンスが流れた。大きな駅だったからか、たくさんの人が降りた。私の前に立っていた例のサラリーマンもいなくなつた。彼はずっと鬼のままだった。

別のサラリーマンが乗ってきた。私はその人が、先ほどの人とど

ここが違うのかが分からなかった。みんな似たような顔に見える。全員同じような立場で立っている。

違うのは、立ち上がる駅の名前だけ。それは誰もがひとつずつ。そう考えると、平等なゲームである気がした。

私は結局、目白まで一周してみることにした。学校には行けないけど、まあいいやと思った。中学校はあまり好きではなかった。小学校から一年しか経っていないはずなのに、なんだか色々なことが難しく、面倒くさい。勉強はわりとできるので簡単なのだけど、それ以外のことがとても難しい。

ほかの駅で降りてみたくもあつたけれど、定期を越えた範囲で下車できるほど、お金は持つていないことに気づいたのだ。だからぼうつとしたままで、地名だけは聞いたことがある見知らぬ駅を眺めた。秋葉原、秋葉原とアナウンスが流れる。リュックサックを背負った、じめじめとした人しかいない街なのかと思っていたけど、意外といろんな人がたくさん降りる。だけど駅にある広告には、女の子のアニメキャラクターがいて、部分的にイメーシ通りなのは笑ってしまった。

巣鴨を離れてから、学生の人口は少なかった。東京、有楽町、新橋。サラリーマンらしき人が続々と降りて、まだ続々と乗る。浜松町という名前の街で、一気にすいた。よく見えなかった窓の外がいきなり見えた。高いビルがたくさん見えて、街の雰囲気違った。ここをジーンパンで歩いたら、浮いてしまうだろうかと思った。

そしてその瞬間に、奇妙なことに気がついた。人がいっぱい見えなかった向かいの座席に、女の子が乗っていた。

他人のことをとやかく言えないという自覚はあるが、とても、この街からも電車からも浮いていた。同じくらいの歳に見える。

もう秋に入ったと言つのに、透けるような白の、涼しげなワンピース

ースを着ている。足下もかわいいサンダルだった。さらさらと長い黒の髪。かわいい子だと思った。うちのクラスで一番かわいい女の子と、同じくらいにかわいい。

女の子は荷物のひとつも持つておらず、本も読んでいなければ音楽も聞いていないし、携帯電話の類も取り出さない。だけど、眠ったりはしていない。きれいな姿勢で、スーツ姿のおじさんたちに紛れて、ちょこんとお行儀よく座っている。

奇妙なのは、誰もその女の子に注目していないことだった。遠い中学の制服を着た私はこの場からひどく浮いていて、たまに、本当にたまに、物珍しい視線で見られたりもししていたのに（それでも大部分の人間が私の存在など気にしていないようだったが）、その女の子に関しては、誰も気にしない。スーツのおじさんがひとり乗っているような扱いで、空気のように、その場になじんでいる。

そんなわけがあるか、と思った。

品川でまた人の流れが復活した。女の子の姿はたちまち見えなくなった。アナウンスに、池袋方面行き、と加わった。ついに半分を越したのかと、漠然と思った。

恵比寿、渋谷、原宿、代々木……と、知っている名前の街が過ぎていった。入れ替わりも大きかった。ごちゃごちゃしすぎて笑えてきた。そして新宿を越えて、人の波が一瞬だけ引く。また見えた。さっきの女の子は、まったく変わらない体勢でちょこんと座っていた。入れ替わる人の波は、彼女の存在になど気にもとめなかった。だが、私は驚いてしまった。少なくとも浜松町からは乗っていた。どこまで行くのだろうか？

新宿から少し進むと、見慣れた景色が戻ってきた。目白、目白と、アナウンスが告げる。目的地だった。

女の子はまだ、そこにいた。

路線図をちらりと見た。浜松町はほぼ反対側にある。ならば池袋で降りるのだろうか。ここまで来たら、どこまで乗っても同じだと思った。彼女が降りるところを見届けたら、帰ろう。

池袋についた。女の子は降りなかった。見知らぬ人々が大量に入れ替わった。

大塚に着いた。巣鴨に着いた。駒込に着いた。田端に着いた。……どこまでも進んだ。時間が経ちすぎたのか、人の波も徐々に引いていた。浜松町に着いた。

女の子はそれでも、降りなかった。

夕方になって家に帰ったが、どきどきは引かなかった。

二周目の目白で降りて、乗車履歴を駅員さんに見られてちよつとだけ怒られた後、下校時間まで時間をつぶしてから、とぼとぼと帰ってきてしまった。部屋に入るなりベッドに倒れた。なんだったのだろう。なんなのだろう。

私が根負けした瞬間までずっと、あの女の子は、座席に座り続けていた。

誰も彼女に注目をしない中で、じつと、ずっと、姿勢よく座っていた。どこの駅でも降りなかった。今でもまだ、環状の路線をぐるぐる回り続けているのだろうか？

単にものすごく電車が好きな、変な人なのかもしれない。それはそれで怖い。だけど、想像力が勝手に、もっと怖い方向の推理を告げる。群衆は、人身事故が起きてても悲しまない。その恨みで、あの電車にとりつかれた、幽霊みたいな何かなのかもしれない。

非現実的な妄想にとりつかれて、ぞつとした。とてもきれいな子だったけれど、普通じゃなかった。中学校にいるきれいな女の子にはあるような、活発さも、したたかさも、なにも見えなかった。お人形のようなだった。亡霊のようでもあった。半死人ばかりの電車に、完全に命がない、疲れもなにも関係ない人が、紛れてしまったような。

なんでもそつちの方向に運ぶ頭が、もどかしい。

誰かに聞いてほしい気がしたが、誰にどう説明すればいいのか分からぬ。衝動で山手線を二周したなんて打ち明ければ、話題に飢えている学校の連中に祭り上げられることは目に見えている。とはいえ学校をさぼったことを母親に言うわけにもいかない。親身になつて話し合える友人は、残念ながら、あまりいない。

これに懲りてもうやめよう。山手線の座席を占領してみる嫌がらせなんて、くだらない。

そう思う気持ちとは裏腹に、女の子の顔が忘れられない。きれいだったけど、無情だった。なんだか見ている、胸がざわざわした。

もう二度と会いたくなかった。けどもう一度会いたかった。話しかけることができなかった意気地のなさを呪いながら、無事に家に帰ることができた幸福に感謝しながら、私はしばらく枕を抱きしめていた。

1 (後書き)

山手線を何周もすると、JRの規則により、通常重複分の交通費が発生します。

無賃乗車を推奨する目的で書かれた小説ではありません。ご理解のうえお楽しみください。

駅名は実在のものを使用していますが、学校名や登場人物はすべて架空のものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5621/>

山手線イス取りゲーム

2010年10月22日00時07分発行